

## 行動の動機づけに及ぼす随伴性設定の役割について

### — 内発的動機づけへの適用可能性に関する事例研究 —

伊 藤 康 児

#### 問題

子どものある行動への内発的動機づけを高めようとする時、これまでの認知的動機づけの研究からは、その行動の関連する事物の刺激特性を操作し、よい条件の照合変数をお膳立てする方策が示唆されている。しかし、子どもをとりまく環境には多種多様な事物が存在し、子どもはそれらの事物と関連する行動を任意にとりうるのである。そこで、めざす行動の内発的動機づけを高めるには、当該の照合変数を何らかの意味で大きく重みづけることがまず必要であろう。

そのための方策のひとつとして、子どもに外発的動機づけ（報酬）を与えてともかくもその行動を行なわせ、「行なう」ということで重みづけをしようとする方策が考えられる。これは「やっているうちにおもしろくなってきた」と子どもが感じるような心的過程を働かせようとするものであり、またいいかえれば、内発的動機づけを高めるための呼び水として外発的動機づけを与えようとする発想に立っているとみえる。

ただしこれまでの研究では、内発的動機づけを高めようとして外発的動機づけを用いると、今まであった内発的動機づけがかえって破壊されるとする知見が多かった。これに対しては、①内発的動機づけが低い場合に与えられる外発的動機づけが、内発的動機づけを高める障害になるとは限らない、②与えられた外発的動機づけが報酬として作用せず、むしろ何らかの干渉、ないし罰として受けとられている可能性がある、とする批判がなされる。

そこで、報酬として作用することが保証されている適正な外発的動機づけが与えられれば、それは内発的動機づけを破壊せず、さらにこれを高める可能性があると考えられる。

このような問題に立って実証的研究をすすめていくための基礎として、Premackの強化理論を導入した。この理論ののべるところは、①より生起しやすい行動（MPと略す）をより生起しにくい行動（LPと略す）の生起に随伴させると、LPの生起がふえる、②MPのLPに対する強化値は、MPとLPの間の生起率差に比例する、というものである。ここでは、「MPという行動をすること」がLPに対して強化子として働くとのべている。そこで、LP、MPの2行動間に、「LPを先にしたら

MPをしてもよろしい」という形の随伴性設定を行ないLPを外発的に動機づけようとした。そして随伴性設定をするとLPの生起がふえて、LPが十分重みづけられるかどうか、また十分重みづけられればLPの内発的動機づけが高まっていくかどうか、という2点を確かめようとして、実験Ⅰ～Ⅲを計画した。

最終的には、随伴性設定をするとどのような過程でLPの内発的動機づけが高まっていくのか、ということが定式化されなければならないと考える。そこで、ここではまず諸理論をもとに定式化試論を概念的に展開してみた。そこではまずMP-LP間生起率差を独立変数とする基礎過程を構成し、これを予備実験の中で検証した。そこからさらに、随伴性設定時の過程を構成し、MP-LP間生起率差が小さい時には、LPの内発的動機づけが高まっていくと予想した。このような定式化試論にもとづく予想の当否も、各実験の中で検討していこうとする方向をとった。

#### 実験Ⅰ

目的 LPがなされやすい状況を作り、LPの重みづけさえ十分なされれば、LPの内発的動機づけが高まっていくかどうかを確かめる。

方法 保育園年長組に所属する幼児6名を被験者（Sと略す）とし、各Sには3日間にわたって実験に参加してもらった。まず第1日目は、自由場面における5種類の行動を10分間観察し、それぞれの行動の生起率を算出した。このうち、最も生起率の高い行動をMP、2番目に生起率の低い行動をLPとしてとりだし、第2日目、第3日目は、この2つの行動だけができる状況とした。翌日の第2日目は、まず生起率の関係が $MP > LP$ であることを確認するため、自由場面での行動を3分間観察した。ついで、「LPをある時間先にしたら、MPをある時間してもよろしい」という趣旨の随伴性設定をSに教示し、随伴性設定下のSの行動を10分間観察した。そのあと、随伴性設定の効果を見るために、再び自由場面でのSの行動を3分間観察した。第2日目から6日後の第3日目は、随伴性設定の効果のポストチェックをするため、自由場面でのSの行動を3分間観察した。なお、すべてのセッションで各行動の持続時間を行動記録器を用いて測定し、これを行動生起量の測度とした。

結果 LPの内発的動機づけの高まりは、①随伴性設定がなされている間でも、LPがMPをするための道具行動としてだけでなく、LPそれ自体をするためになされることがあること、②随伴性設定が解除されて、MPが自由にできる状況になってからも、LPが随伴性設定以前に比べて多くなされていること、の2点から判断された。結果は6ケース全部でLPが多くなされ、十分重みづけられているといえる。その中の4ケースにおいて、LPの内発的動機づけが高まったと判断された。ところがLPへの重みづけは、MPへの動機づけの力によってなされていると判断されるケースは少なく、むしろ随伴性設定の教示を聞いて、「MPをせずにLPをしよう」とする構えがSの中にでき、この構えの力によってなされていると判断されるケースが多かった。

## 実験Ⅱ

目的 MP、LPの他に、随伴性設定に関連せず、いつでも自由に行ないうる行動(IRと略す)がひとつ加えられている状況を作る。そこでMP、LPの間に随伴性設定をした時、LPがIRに先がけて行なわれ、LPに十分な重みづけがなされるかどうかを確かめる。ただしここでは、IRの生起率がMP、LPよりもさらに低い状況を作ってみた。

方法 保育園年長組に所属する幼児6名をSとした。手続きは、第1日目の5種類の行動の中からMP、LPの他に、最も生起率の低い行動をIRとしてとりだし、このIRを第2日目、第3日目で自由に行ないうる行動として設定する以外は、基本的に実験Ⅰの手続きと同じ。

結果 6ケース中3ケースでLPが多くなされ、十分重みづけられているといえる。しかしその中からLPの内発的動機づけが高まったと積極的に判断できるケースはなかった。一方随伴性設定をしたことで、かえってこれと関連しないIRを重みづけてしまったケースがあらわれた。このようにLPの重みづけが減ったことについては、統一して説明しうる要因が示唆されるには至らなかった。

## 実験Ⅲ

目的 実験Ⅱと同じく、MP、LPの他にIRがひとつ加えられている状況下で随伴性設定をした時、LPがIRに先がけて行なわれ、LPに十分な重みづけがなされるかどうかを確かめる。ただしここでは、IRの生起率がLPより高く、MPよりは低い状況を作ってみた。

方法 保育園年長組に所属する幼児5名をSとした。手続きは、第1日目の5種類の行動の中からMP、LPの他に、生起率が2番目に高い行動をIRとしてとりだ

し、このIRを第2日目、第3日目で自由に行ないうる行動として設定する以外は、基本的に実験Ⅰの手続きと同じ。

結果 5ケース中2ケースでLPが多くなされ、十分重みづけられているといえる。しかしその中からLPの内発的動機づけが高まったと判断できるケースは、ここでもなかった。一方残りの3ケースは、随伴性設定をしたことでかえってIRを重みづけてしまったケースと判断された。このようにLPの重みづけが減ったことについては、IRの生起率がLPの生起率より高いこと、及びそこから形成されたSの構え、の2つの要因から説明しうる可能性が示唆された。

## まとめ

以上のような3つの実験結果から、次の2つの結論が導かれた。

①随伴性設定をしても、他の行動に先がけて、LPは無条件に十分な重みづけがなされるわけではない。

②実験Ⅱと実験ⅢでLPに十分な重みづけがなされたのに、LPの内発的動機づけが高まらなかったのは、実験ⅠでLPになされている重みづけの量と比べると、今ひとつLPの重みづけ量が足らなかったためと解釈された。そこでLPの重みづけ量、すなわちLPのなされた量が、LPの内発的動機づけの高まりを左右する要因として重要である。

それではどのような過程が働いて、LPの重みづけが十二分になされたり、また全くなされなかったりするのかわ、という点について討論がなされた。これについては定式化試論の中で想定した過程と、Sのもつ構えによってもたらされる過程の2つが示唆されたが、この2つの過程が背反的に働く場合と複合的に働く場合のあることが結果の分析から示された。そこでこの2つの過程がどのように働くかを統一的に説明しうるような理論を構成することがもとめられる。ただしまず当面の課題としては、Sの構えと各行動のパフォーマンスとの関連、及び構えの形成を規定する要因、の2つについて探索的に調べられることが必要であるとされた。しかるのちに、2つの過程を統合する試みを展開することがもとめられよう。

また本研究の理論的・方法論的限界についても論じられ、今後これらの限界をのりこえて、随伴性設定の効果を一一般化していく方向で研究が展開されていく際に生じてくる諸問題についても、考察を行なった。